

特別インタビュー……………形井秀一氏に聞く

WHOの国際標準経穴・361穴の位置は どこまで決まったか

国際標準経穴部位のガイドラインづくりに向け、WHOが動き出した。WHO西太平洋地域事務局(WPRO: Western Pacific Regional Office)が音頭をとり、中国、韓国、日本の3カ国の議事が急展開している。昨年10月31日、11月1日にはフィリピン・マニラで「第1回経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議」が、3月17、18日には中国・北京で「第2回会議」が開かれ、経穴部位の世界標準化に向け、猛スピードで審議が進んでいる。早ければ来年にも、経穴部位や取穴法を明確化した日中韓の標準化案がまとまりそうだ。

これまでの経緯と、北京での会議の内容、そして今後のスケジュール等について、第2回非公式会議で日本の参加メンバーの団長を務めた形井秀一・筑波技術短期大学鍼灸学科教授に話を聞いた。

(聞き手・編集部)

——経穴部位の世界標準化に向け、動きが急展開しているようですが、再確認するためにも、昨年10月31日、11月1日にフィリピン・マニラで開かれた「第1回経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議」以前までの状況について、その経緯を簡単に説明してください。

形井 表1を見れば、だいたい経緯はわかると思います。簡単に言えば、今回の一連の会議が再開される以前、すなわち前回までの鍼用語標準化に関する会議が一段落した1989年の段階では、361正穴の表記法と配列は統一されました。しかし、その経穴の標準部位が具体的にどこなのか、その取穴法をどう表記するかまでは、各国の主張の違いが大きすぎたために決まっていなかった。

——1989年に決まった標準経穴の名称の表記方

法というのは、医歯薬出版から出された『標準経穴学』(日本経穴委員会)に記載されているのがそうですね。

形井 基本的にはそうです。ただし、WHOが刊行した“STANDARD ACUPUNCTURE NOMENCLATURE Second Edition”が最終の公式なものですが、各国の事情を反映しているため各国で刊行されたものは多少異なっているようです。医歯薬出版のものは概ねWHOでの決定に沿っています。

WHOで定められている表記は、経絡(14経絡)は、英語名、略語(Alphabetic Cord)、ピンイン、そして漢字の順です。また、経穴は、経絡で表記された略語、すなわち、アルファベット2文字に数字(経絡ごとに流注に従った順番で経穴につけた番号)をつけたもの、ピンイ

表1 これまでの経穴の世界標準化の動き

1965年	日本経穴委員会が設立。同年10月に行われた第1回国際鍼灸世界学会において、第1回国際経絡経穴委員会が開催される。	が参加。経絡・経穴について英語名、略語 (alphanumeric cord)、ピンイン、漢字 (経絡・経穴ともに正字。カッコ内に中国、日本、韓国の漢字) で表記することに。	
1969年	第2回国際鍼灸世界学会がパリにて開催されるが、国際経絡経穴委員会は開催されず (以後、国際鍼灸世界学会では1度も開催されず)。日本経穴委員会は自然解散。	1984年	東京にて地域諮問会議が開催。日本、中国、韓国など8カ国が参加。
1973年	日本経穴委員会 (当初は日本経穴検討委員会) が再び発足。	1985年	香港にて第2回WHO地域ワーキング会議開催。日本、中国、韓国など7カ国が参加。
1974年	経絡経穴国際協定委員会が国際鍼灸世界学会から独立して開催。日本、オーストラリア、フィリピン、韓国の4カ国が参加。	1986年	ソウルにて第3回WHO地域ワーキング会議開催。日本、中国、韓国など6カ国が参加。
1978年	日本で古典55編における経穴の記載の調査が始まる。	1989年	・ジュネーブにて鍼用語標準化国際会議開催。①部位の記載が明らかな最も古い文献を採用②部位の表現は現代の解剖学に基づいて表記③解剖学的な基準点を設けて、古典記載の分寸に従って分数で割り込む、のそれぞれについて各国で検討し、最終的にはジュネーブのWHOにて会議を開くことを要請した。 ・日本経穴委員会の手による『標準経穴学』(医歯薬出版) が刊行。
1981年	WHOの要請を受けて、経絡・経穴に関する国際的統一について、昭和大学医学部坂本浩二教授が世話人となり、WHO西太平洋地域事務局長中嶋宏氏と日本経穴委員会および同専門委員会数名による第1回の会合が開かれた。		
1981~1982年	第1次~第4次日中会議が開催。第1次会議において14経の経穴数は361穴と定められた。		
1982年	マニラのWHO事務局内でワーキング会議が開催。日本、中国、韓国など9カ国		※本表は矢野忠氏 (明治鍼灸大学) が作成したものを、編集部が簡略化したものです

ン、そして漢字で表します。漢字は経絡・経穴ともに正字 (旧字, original form) を用いるけれども、それぞれの国の実情に合わせた漢字を使用することはできるといふもので正字のあとのカッコの中に、中国、日本、韓国の順に並べることになっています。たとえば手太陰肺経であれば「Lung Meridian LU Shòutàiyīn Fèyīng 手太陰 (陰) 肺経 (经, 経)」となり、尺沢穴なら「LU5 Chiozè 尺澤 (泽, 尺)」となります。しかし、このまますべて表記するのは煩雑ですが……。

——1989年から14年間の空白期間があったわけですが、昨年、話が急展開したのはなぜですか。

形井 その辺の真相はわかりませんが、1989年10月にジュネーブで開かれた「鍼用語標準化国際会議」において、経穴部位について、①部位

の記載が明らかな最も古い文献を採用する、②部位は現代の解剖学に基づいて表記する、③解剖学的な基準点を設けて古典記載の分寸に従って分数で割り込む、の3点について各国で検討することが決まっています。その検討課題が10数年の時を経て、何らかのきっかけで動き出したのでしょうか。

——会議の再開を切り出したのはどこですか。

形井 WFAS (世界鍼灸学会連合会、会長、事務局は中国) です。2002年2月にWFAS終身名誉会長の王雪苔氏がWFAS副会長の黒須幸男氏に「WHOで経穴の標準化をしたいので参加してほしい」という話がありました。そこで、日本経穴委員会を継承していた全日本鍼灸学会副会長の矢野忠氏がこの件の担当者となって、全

日本鍼灸学会、日本鍼灸師会、東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、日本東洋医学会の5つの関係団体に打診したところ、「それはぜひ参加すべきだ」ということになりました。

—WHOではなく、WFAS (中国) から話が切り出されたのですか。

形井 話の流れからすると、中国側から何らかのアプローチをしたのだと思います。中国は以前から諸外国の多くの医師たちへ鍼灸の教育をしていますから、1989年の経穴名の統一以降、早い時期に経穴部位の統一ももくろんでいたのかも知れません。WFASの活動も同様と言えるでしょう。

また、昨年10月にWHO西太平洋地域事務局(WPRO)のTraditional MedicineのMedical Officer (伝統医学担当官) となった崔昇勲氏(Dr. Choi Seung-Hoon) は、就任後、おそらくはじめての大きな仕事として、今回の経穴部位の統一に前向きに取り組んでおられるものと思います (前々任者は、全日本鍼灸学会の現国際部長の津谷喜一郎氏です)。

いずれにせよ、中国は非常に意欲的に取り組もうとしているようです。今回の標準経穴部位に関するWHO案も中国が作成したもののようなので。

—ということは、15年前は各国の主張の隔たりが大きすぎてまとまらなかったということでしたが、今回は他の国の主張を丸く収められる自信が中国やWHOにはあるんでしょうね。そのくらい、中国の経穴学研究が進んだということでしょうか。

形井 ずっと研究は続けていたんでしょうね。ただ、それは中国だけでなく、韓国に対しても感じました。経穴部位の解剖学的研究は韓国では相当進んでいるようです。ですから、中韓両国ともずっとやってきたんだな、というのが、

北京の会議に出席してみても実感ですね。

—では、日本は宿題をサボっていた？

形井 サボっていたというは語弊があると思います。日本経穴委員会は、1989年に『標準経穴学』を上梓した時点でその使命を終えたと判断され、解散します。ただその後、日本経穴委員会の活動がまったく継承されなかったのではなく、全日本鍼灸学会の研究部の中の経穴委員会としてその活動が引き継がれる形になりました。ですから、サボっていたわけではありません。しかし、全日本鍼灸学会の経穴委員会は古典的な研究よりも現代医学的な研究に重点を置いたため、ジュネーブから持ち帰った宿題は正直言ってあまり進んでいなかったといわざるを得ないでしょう。また、一方で、日本国内でも、当時日本経穴委員会の考え方と他の団体の考え方が必ずしも一本化されていなかったようで、さらに先に進むためには、調整のためのエネルギーを蓄える時間が必要であったのではないのでしょうか。

—会議の中身ですが、まずマニラの会議ではどんなことが話し合われ、何が決まったのですか。

形井 私はマニラの会議には出席していないので、会議の概略だけを簡単にお話します。参加国は中国、韓国、日本の3カ国で、日本からは全日本鍼灸学会参与 (WFAS副会長) の黒須幸男氏と同学会副会長 (明治鍼灸大学教授) の矢野忠氏がアドバイザーとして出席し、同学会国際部長 (東京大学教授) の津谷喜一郎氏がオブザーバーとして同席しました。この会議では、古典の選定の原則、解剖学的なランドマーク等の設定、比例配分による表示とCUN (寸) による表示、基準尺度の設定、経穴部位の記載などを明確にした経穴の標準化のガイドラインを作成することが確認され、タスクフォースによる

作業として「古典の選定」と「ランドマーク決定」のための2つのスモールグループを設定することが決められました。そして、今年の3月に北京で「古典の選定」について、さらに6月に千葉で「ランドマークの決定」について、会議を開催することが決まりました。

— 3月の北京の会議には形井さんは実際出席されたわけですが、どうでしたか。まずは各国の出席者の印象から聞かせてもらえますか。

形井 北京の会議は正式には「国際標準経穴部位の発展に関する第2回非公式会議 (Second Informal Consultation Meeting on Development of International Standard Acupuncture Points Locations)」と言い、3月17、18日に中国・北京市東直門にある中国中医研究院で行われました。中国中医研究院は王雪苔氏が長年在籍されていたところで、鍼灸研究所もあるところです。中国の出席者 (アドバイザー) は中国針灸学会高級顧問の王雪苔氏のほか、中国中医研究院の黄龍祥、晋志高の両氏、上海中医薬大学の李鼎氏の4人で、韓国は慶熙大学校の3人、姜成吉氏 (韓医科大学)、李恵貞氏 (東西医学大学院)、金容奭氏 (東西医学大学院)*、日本からは私と、北里研究所東洋医学総合研究所客員研究員の小林健二氏、経絡治療学会学術部の浦山久嗣氏の3人が発言権のあるアドバイザーとして出席し、明治鍼灸大学教授の篠原昭二氏がオブザーバーとして、また、北里研究所東洋医学総合研究所客員研究員の浦山きか氏もオブザーバー兼通訳として同席しました。このほか、WPROの伝統医学担当官の崔昇勲氏も、もちろん主催者として出席しました。

まず中国側の印象ですが、今回の会議の議長

を務めた王雪苔氏は議事の進行の仕方がとても上手でした。横柄さは微塵もなく、日本と韓国に配慮したバランスの取れた進行ぶりが印象的でした。李鼎氏は古典医学理論に長けているし、黄龍祥氏は古典を全部暗記しているんじゃないかと思うくらいすごい人で、「切れるな」という感じがしました。黄氏などはまだ50歳前後と若いし、層の厚さをまざまざと見せつけられましたね。

韓国のメンバーは韓医学の最高峰の大学である慶熙大学校の所属ですが、姜成吉氏は1994年の青森でのWHOの会議「WHO国際シンポジウム」の時にも出席された韓国で最も外国に名の知れた韓医学博士ですし、李恵貞氏は、中国語も英語も堪能な方で鍼灸日本経絡学の研究者です。また、金氏は若いですが、ツボの解剖学的な研究を専門的にやってきているなという印象を発言から汲み取ることができました。経絡・経穴にきちんと取り組んでいる人を送り込んできたな、という感じでした。

また、日本から参加した浦山久嗣氏は、経絡治療学会の学術部員ですが、会誌の『経絡治療』にツボを取り上げた学術的な連載をしており、今、日本で最もツボの研究を熱心に行っている研究者の一人といえるでしょう。小林氏は、北里大学の客員研究員ですが、日本内経医学会でも熱心に活動しています。古典のデータベース作りに関しては日本の第一人者といっても良いでしょう。日本側も強力な布陣で参加することが出来ました。

— 実際の会議の中身は？

形井 会議で審議された事項は「経穴部位決定の理論および方法」「経穴部位決定のための体のランドマーク (基準点) および体表点」「骨度法」「標準経穴部位表記の方法」「次のステップへの活動計画」の5点です。

*韓国では、日本の大学に当たるものを「大学校」、学部に対応するものを「大学」という。

まず経穴部位決定の理論および方法についてですが、ツボの位置を決定するに当たっては歴史と現実を尊重するという基本的な考え方に基づいて、文献の分析、臨床実践、実測を総合して決定することになりました。文献の選定に当たっては最も古い古典を採用することが確認され、中国側は『黄帝明堂経』『千金方・明堂』『銅人腧穴鍼灸図経』の3点をあげました。しかし、日本側が『『黄帝明堂経』は古いと言っても原典は現存しない、今あるのは後世に書かれたものだから、それなら実存するもので一番古い『甲乙経』を基本とするべきではないか』と主張し、半日の議論の末、日本側の主張が受け入れられ、結局『黄帝明堂経』『甲乙経』『千金方・明堂』『銅人腧穴鍼灸図経』の4点になりました。この点については、3月14日に、国内で、前日本経穴委員会の松元氏、黒須氏、矢野氏、津谷氏とアドバイザー3人とが、日本鍼灸会館で事前討議をし、会の進め方や主張すべき点なども準備して望んだ結果です。

また、古典によって記載された経穴部位が不確かで一貫していない場合には4つの基本原則も設けました。すなわち、①もし古典に経穴部位と一致する図譜(チャート、ダイアグラム)、モデルがあれば、最終的な部位は主にそれらにより決定する、②経穴の配列の部位や順序、経穴の名称、経穴部位の決定の方法など関連性のある情報のすべてを十分に検討する、③1つのツボの部位を決定するにはそれと関連する経穴部位を検討する必要がある、④体表の指標で決められた位置が同身寸によるものと異なっている場合は前者が優先される、というものです。

経穴部位の決定法については、①目印(基準点)や体表指標による部位(体表点)を選定し、体表解剖学的に部位を定める、②骨度法で表す、③同身寸法を用いる、の3つの方法を組み合わ

せて行うことになりました。ただ、①②が基本で、③はあくまで補助的に用います。①②の方法で、部位を決定できない経穴は少ししかないからです。

——経穴部位を明確に表現するためには、基準点とか、体表点が重要になるわけですね。

形井 そうです。性別、体型、年齢などの要素を考慮しなければなりません。頭部、上肢、下肢に全部で17の体表点が決まりました。また、基準となる経穴も27決まりましたが、これについては韓国から曲骨と大椎、日本から足三里を加えては、という意見があり、その3つの経穴については決定が先送りになりました。なお、今回決まった体表点と基準経穴に関する具体的な内容についてはまだ公表できませんが、もう少し議事が進めば本誌にも報告できると思います。

——骨度法についてはどうですか。

形井 骨度法については部位ごとにほぼ決まりました。部位によっては現在、鍼灸学校等で教えている教科書とは違っているところもあります。たとえば前腕の骨度法は1尺2寸に決まり、これなんかはすべて今の教科書とは取穴法が変わってきますね。これについても、詳細な報告はもう少し経ってからになります。

——標準経穴部位の具体的な表記についてはまとまったのですか。

形井 最新の解剖学用語を用いて表記するなどの基本的な考え方や、部位と取穴法をそれぞれ分けて表記することは決まったのですが、個々の経穴についての具体的な表記までは決まっていません。ただ裏話を打ち明けると、実は324穴についてはその位置が決まってしまうような雰囲気になったのですが、日本側は「待った」をかけさせてもらいました。

——どういうことですか。

形井 中国側が中国および韓国の経穴学の統一教科書と日本の『標準経穴学』を調べたら、324穴は日中韓の3カ国で表現は違っても位置が同じだったというのです。だから、「日本もこれでいいですか」と詰め寄られたわけです。しかし、『標準経穴学』が、この会議で最初に決めた依拠する4つの古典に必ずしも則っていないことや、日本では実際の教育現場では使われているわけではないので、日本側としては「ちょっと待ってください」となったわけです。ですから、この324穴については各国に持ち帰って、7月末までにそれでよいかどうか検討することになりました。

これについては話を1989年当時に戻すと、中国ではその翌年にWHOでまとめた標準経穴の361穴をベースにし、その経穴の部位も定めた教科書を作成し、それ以来、少なくとも対外的にはその教科書を実際の教育現場で統一教科書として使っているということになっているわけです。韓国も同じ頃、同様の教科書を作成し、それを統一教科書として使っていると述べています。ところが、日本はどうかとなると、『標準経穴学』は作成されましたが、それが、教科書として使われることはありませんでした。東洋療法学校協会の加盟校は協会が作成し医道の日本社が出版する教科書を使い、盲学校は理教連関係校が作成した理療科用の教科書を使っています。WHOで標準経穴名が決まったにもかかわらず、教育現場では教育されてこなかったのです。この点が議論を難しくしている要因の1つです。

— ということは、今後のスケジュールはどうなるのですか。

形井 北京の会議のあと、4月25日に全日本鍼灸学会、日本鍼灸師会、東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、日本東洋医学会の5つの関

係団体が母体になり、第二次日本経穴委員会が立ち上げられました。この経穴委員会で最初に行う仕事は、まず7月末までに、北京から持ち帰った宿題の324穴について異論があるかないかの回答を出すことです。異論がなければ、この324穴の位置は次の会議ですんなり決まります。また残りの37穴については、異論がある場合にはその資料を用意する必要があり、その資料には異論のある位置とその裏づけとなる文献を示さなければなりません。北京で決まった次回の会議開催は、東京になるか大阪になるかはわかりませんが、日本で第3回の会議が10月に開催されます。そこで、異論のあるツボを逐一審議することになるわけです。それと、経穴図も統一しようということになっていて、これについても話し合われる予定です。

— 当初、第3回会議は6月に千葉で開催することになっていたのでは？

形井 確かに6月11日～13日には千葉の幕張メッセで全日本鍼灸学会の学術総会があり、マニラで決めた時は、その学会の開催に合わせて会議を持つことを予定していたのだと思います。しかし、6月には、25日～27日に日本東洋医学会も横浜であり、鍼灸関係の大きな学術大会が集中します。その上、4月に第二次経穴委員会を立ち上げる予定でしたから、その2カ月後というのは、開催国としてはとても準備の時間が足りないということを説明して、延期してもらいました。

— 1989年まで行われていた鍼用語の統一の動きと比べると、ものすごいスピードで議事が進展しているようですが、そもそも経穴部位を世界標準化しても、当時のように日本の鍼灸学校が教科書として採用しなければあまり意味がない気もしますが……。

形井 その通りです。ですから、第二次日本経

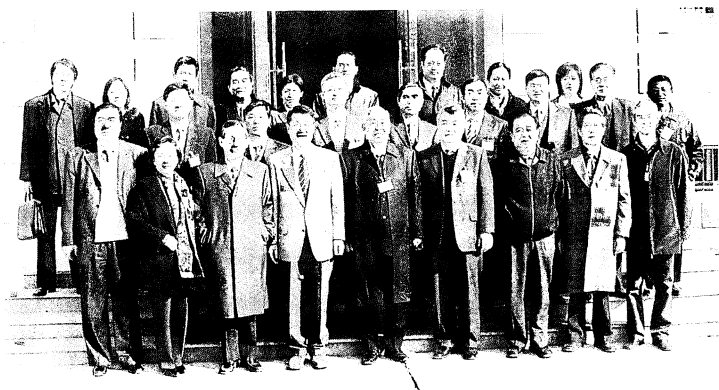
穴委員会のメンバーでもある東洋療法学校協会と日本理療科教員連盟は、今回の一連の会議で世界標準化がなされた暁には、その標準化されたものに基づいた経穴学のテキストを教科書として採用することをお願いしたいのです。そうでないと、「経穴委員会の委員にはなりますが、我々は独自の道を歩みます」というのでは話になりませんかね。

また、第一次の10年前とはスピードが違うのは、鍼灸の分野のこのような動きもやっと他の分野の世界的な動きのスピードに近づいたためと考えます。この十数年間に、鍼灸界には、世界の動きに影響するような、あるいは世界の動きと連動する動きが出ていることからわかります。例えば、WHOのガイドラインやアメリカ合衆国のNIHの声明、英国医師会 (BMA) や英国医師鍼学会 (BMAS) のレポートなど、世界の鍼灸の動きに影響を与えるようなものが諸外国から提起されています。

このように、世界の動きを視野に入れた鍼灸の動きが、必然的に求められていますし、また、CAM (相補代替医療) の動きが活発であり、世界的な規模で代替医療の1つとして鍼灸が注目を集めていることも無関係ではないと考えます。

——最後にぜひお聞きしますが、10月までにまとまりそうですか。

形井 ぜひまとめたいたいですね。でも、もし10月の会議で未解決の問題が残ったとしても、そうなった場合には、第4回目の会議が来年の春ごろには開催されるでしょうから、そのときまでには大勢が決まるのではないのでしょうか。



今回の会議の中心となった参加者たち

もちろん、つけ加えておきますが、現在非公式会議として3カ国で決めたことは、その後他の国々が参加した公式の世界会議で最終決定をしなければなりません。その段階でまた、もめて時間がかかることも予測されます。しかし、ともかく、差し当たっての作業目標は3カ国が今秋あるいは来春ぐらいいまでに合意することです。——ということは、日本国内ではあまり異論が出ずに、順調に進んでいるわけですね。

形井 いや、具体的な作業はまだこれからです。とにかく問題は山積しているので、まだ先行きは不透明ですが、とりあえず7月までに324穴の中で一致し合える経穴について、回答を出すことに全力を尽くします。

——あまり時間がありませんよね。

形井 そうですね。でも、鍼灸に関する視点や主張が違っていても、経穴の位置を決める際に共通の考え方がもてれば何とかかなと思います。——それはどういうことですか。

形井 鍼治療の効果に関する、ものすごい量の論文が世界各国で出てきています。でも、あの国とこの国で、あるいはあの流派とこの流派でツボの位置が全然違う、という主張ばかりしていたのでは話になりません。もちろん、ある1つのスタンダードでしか伝わらないのではな

く、伝わり方はいろいろあっていいと思うけれども、これだけ世界各国に鍼が普及した状況の中で、基準や標準があいまいであることは、互いに交流しようとする時にマイナス面が多すぎるでしょう。その観点からは、1つのスタンダードを決めていく、という動きはある意味で必然だし、そしてその動きをサポートしていく役割が鍼の歴史を長くもっている日本、中国、韓国には特にあると思います。WHOが世界レベルで統一しようとしている状況で、日本だけが知らん振りではできませんし、むしろ積極的にリードする気概が必要でしょう。この会議の司会を務めた王雪苔氏が開会の挨拶で、「WHOから依頼を受けた3カ国のツボの位置については共通点がある。しかし、異なる、細かいところは、意見を交わして修正しよう。友人同士で話し合うように、(親密に)話し合って解決しよう」ということを言われましたが、その姿勢が大事だと思います。

また、当然ですが、世界標準ができたからといって、そのツボの位置しか使えないというわけではありません。世界標準ができた後でも、

「臨床的には自分は少し違う場所を使っている。こっちの方が効果が高いんだ」というのであれば、そのことはむしろ声を大にして訴えるべきです。しかしそのためにも、世界標準という位置が地図上に明示されなければ、自分の位置をはっきりさせられません。共通の目安になる位置も示さないで「この点が大事ですよ」と言っても、「その点はどこにあるんですか」となる。これではみんなに納得してもらえない形では説明できません。ですから、自分の主張したい部位をみんなに納得してもらうためにも、とりあえず目安になる標準の位置の名前を付けましょう、という形で妥協ができるかどうかです。自分が表現したいことと少し違う表現になるかもしれないけれども、より多くの人にわかってもらえるのであればとりあえずそれを認めよう。その表現に対して、違う部分は後で補足して表現すればいい。そういう姿勢がもてるかどうか。それができるならば今回はうまくいくし、逆にそれはできなければうまくいかないと思います。私は今回、北京での会議に出席してみて、つくづくそう思いましたね。(終)

まんが 中国古来の「養生法」

周春才 絵・文 鈴木博 訳 A5判 304頁 定価1,680円(税込) ¥340円

本書は、中国古来の智慧が凝縮した「からだと健康の取り扱い説明書」。陰陽五行に基づき、二千年にも及ぶ膨大な臨床データを解析して生まれた中国伝統の養生法が、楽しいまんがでカジュアルに学べる。中国独特の理論や人体のメカニズムをまんがを使ってわかりやすく解説。



フリーコール 0120-2161-02 医道の日本社 ご注文 FAX 046-865-2707